

## 根付作家 大垣 谷羽様より彫刻刀・書籍・素材など貴重な資料の 数々を、京都 清宗根付館にご寄贈いただきました。

同氏は神奈川県横浜市で長年に渡り作家活動をされていましたが、この度作品制作を終えられるとのこと  
で、根付館の展示に役立てて欲しい  
とご家族同意の下、お引き取りに行  
かせていただきました。作家ご本人  
とお会いすることは叶いませんでし  
たが、工房を訪れて驚いたのは素材・  
彫刻刀・砥石・サンドペーパー・染料  
など作品を制作するための道具がき  
ちんと整理されており、当館の所蔵

作品にも表れている精巧で丹念な作  
品が生まれる理由が少し分かる  
ような気がいたしました。さらに同  
氏は大工職人としてもご活躍をさ  
れ、制作台も自作されておりこちら  
もお願いして持ち帰らせていただき  
ました。当館では根付の展示・保存の  
みならず、貴重な資料も後世に残し、  
ご来館の皆様にも根付を身近に感じ  
ていただけるように展示方法も模索  
して参ります。



### 根付研究 最前線

## 『既存の＜もの＞から新たな＜留具＞へ』

公益財団法人 京都 清宗根付館  
学芸員 大西 弘祐 (忠雲)

腰に幾つもの埴物を同時に佩用していたのは、当時、市井を賑わしていた  
不埒な行動をするかぶき者の風体を取り入れた新興の芸能者等でした。  
ここで最も研究者を悩ませ、しかし心躍らせるのは、留具が絵画資料では  
確かに描かれてはいるが、しかし同時代の文献史料には記されていない  
点です。断っておけば、管見の限りでは、天正期（1573～1592）以前  
の絵巻物等の絵画資料では、その筆致で判然とし難いところはありますが、  
帯に埴物を脱着させる際の留具を描いたものは見当たりません。  
ここでは、埴物は帯に直接に、あるいは腰に指した護身用の刀である腰刀  
にからげられて佩用されています。もちろん、同時代の文献史料にも留具  
にあたる語は確認できません。しかし繰り返しになりますが、天正期  
（1573～1592）以降に描かれる絵画資料、所謂、風俗画には留具は  
確かに描かれているのです。留具がかぶき者を表象する一つのアイテム  
だったとすれば、留具の名称の記載もあってよいようなものですが、しかし  
文献史料には見当たりません。ここをどう解釈するかは、当時の歴史をより  
再構築できる文献史料の発見を待たねばなりません、筆者は少なくとも

一つの仮説を立てることは可能だと考えています。それは、新たに嗜好  
された目新しい埴物に対して、帯への脱着器である留具は、単なる副次的  
なものであり、記述者の目には入らなかったのではないかとことです。  
そうであれば、この脱着器が、奇抜で新奇な埴物とは異なり、既存の何かで  
あって、あるいは、あるものを用いていくつかのものを束ねるというその使用  
方法自体が、既に知られていたため、あえて記載する必要がなかった  
可能性です。つまり、この脱着器が＜既存・既存＞の内にあったという  
ことです。そしてこの脱着器に「帯」云々という新たな名称を付すことを  
社会が促し、後に慣用していくことを考えれば、この時期に服飾への大きな  
価値の転換、とりわけ感性的にも社会的にも埴物と留具への新たな  
価値の芽生え、つまり、脱着器への新たな社会的な「読み替え」があった  
ことは間違いないように思います。  
これを促した淵源は、政治体制の転換が引き起った明治期に同じく、  
西欧、つまり世界の政治システムの転換に伴った「南蛮」との遭遇で  
あったと感じるのは筆者だけでしょうか。

### 2024年 4月～6月の特別企画展のご案内

## 大胆不敵、偉そうだから面白い。『根付の面構え』展

4月「顔、かお、貌」展 ■ 4月2日(火)～30日(火)

5月「はんなりと雅」展 ■ 5月1日(水)～31日(金)

6月「粋と洒落」展 ■ 6月1日(土)～30日(日)

京都 清宗根付館 公式ホームページのTwitter、Instagramにて、最新情報や作品  
画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞(奈良県大和郡山市より授与)、家庭画報(目次頁)に毎月掲  
載、NHKプレミアム「美の壺」出演



公式サイトはこちらから▶



佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の  
継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。



## 京都 清宗根付館とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表  
取締役会長 木下宗昭による「日  
本のよき伝統を、日本人の手によ  
って、日本に保管したい」という  
発意によって、ここ文化首都・京  
都に設立された、日本で唯一の根  
付を専門とする美術館です。当館  
では、「新たな挑戦」と「絆」をむ  
ね(宗)とし、根付と根付をめぐる  
文化の継承・創造・発展を目指し、  
＜魅せる＞＜育む＞＜繋がる＞を  
使命に、地域と皆さまに開かれた  
美術館として活動しています。



[ 目次 ]

- 企画展の見所
- 根付館便り
- 根付研究 最前線

[ 発行元 ]

公益財団法人 京都 清宗根付館  
〒604-8811 京都市中京区壬生  
賀陽御所町46番地(壬生寺東側)  
電話 075(802)7000  
www.netsukekan.jp/



日本で唯一の現代根付専門美術館 京都 清宗根付館『企画展』のご案内

## ちいさきものは、みなうつくし。 『思い入れのある根付』展

根付は日常を楽しむ遊び心から生まれ、庶民の生活に根差  
して発展しました。根付の特徴は、持ち手の快不快や好き  
嫌いを反映している分身といえます。また人に見せることを  
前提にして趣味の良さや生活の余裕をさりげなく示す  
役割を持っています。根付作家も持ち手の縁起や幸福を  
願いながら根付を精魂込めて作ります。根付はそうした  
深い思い入れから大事にされ、愛玩されてきました。かつて  
清少納言が「小さきものは、みなうつくし」と記したように  
日常の小さな喜びを見つける姿は昔も今も変わりません。  
今回は「思い入れのある根付」をテーマに、人の心と根付の

相互関係に焦点を当てていきます。  
1月には「Kawaii!かわいい根付」として、小さく愛らしい根付  
を特集します。カワイイは日本独特の感覚として今や世界  
共通語にもなっています。  
2月は「遊び心のある根付」として、見ているだけで楽しく  
なる根付を紹介します。遊び心は根付のもつゆとりや  
洒落っ気にも通じています。  
3月は「私が選ぶ一品」として現役根付作家の協力を得て、  
作家本人が選ぶ作品を一堂に集めます。作家の思い入れが  
たっぷり詰まった作品をご覧ください。

告知ポスター

# 1月 ■ 1月6日(土)～31日(水)

## 「Kawaii! かわいい根付」展

今や世界語となっている「Kawaii カワイイ」ですが、語源は「かわはゆし(顔映ゆし)」に由来し、恥ずかしい、憐れむという意味があり、近世には小さいものや幼いものに心を引き付けられる様子を表すようになりました。カワイイは理想や完全な美とは対極的な不完全さを愛でる、大衆的で本能的な美意識です。現代では不格好や不細工、不気味などといったネガティブな面も受容してキモカワイイ、ダサカワイイ、ブサカワイイとさらに拡張を続けています。1月はそんなカワイイ・ワールド全開の根付たちのワンダーランドへお連れします。



森 謙次 (1974～)  
「葉子職人」 高3.2cm  
黄楊・藪椿・鉄刀木・水牛角  
森の葉子職人をイメージしたリスが主人公。黄楊や水牛角などの様々な素材の色味を活かしながら立体象嵌している。



北澤 泉水 (1968～)  
「狸さまピラミッド 三緑山」  
高4.8cm 陶  
徳川將軍家の菩提寺、三緑山増上寺より。家康のあだ名「狸親父」にちなんでいる。よく見ると一匹だけ外来種のアライグマ!?



宮澤 彩 (1949～)  
「大茶盛」 高4.0cm  
象牙  
奈良西大寺で800年近く続けられている大茶盛式は大きな器で茶を飲むことで知られる。大きな口を開ける蛙がユーモラス。



伊藤 滋女 (1963～)  
「かば君を救え」 高5.1cm  
黄楊  
カバはウシツツキなどの小鳥と共生している。幼いカバを助けようと小鳥たちがワニに挑戦するといったメルヘンを根付に。



永島 信也 (1986～)  
「アメノウズメ」 高7.6cm  
鹿角・ベッコ甲  
天岩戸に隠れたアマテラスをアメノウズメが機転を利かせて巧みに誘い出す。度胸もあり陽気な神をチャーミングに表現。

# 2月 ■ 2月1日(木)～29日(木)

## 「遊び心のある根付」展

思わず頬を緩めたくなる笑い、奇想天外な驚き…根付はそんな遊び心に溢れています。遊び心は日本美術の核心であり、滑稽さや愛嬌さの中に隠された真理を表現しようとしてきました。根付でも遊び心は自由な視点を解放させて、予定調和に疑いを持たせることで、今までの世界に新たな意味を見つけさせます。その洒脱さや諧謔さは「ひねり」と呼ばれています。娯楽を楽しむ庶民感覚は現代のサブカルに通じ、現代の作家たちが遊び心に興じながら、作家が見据える現在を浮かび上がらせます。新たに創作した作品を中心にをご紹介します。



田神 十志 (1957～)  
「おしくらまんじゅう」 高4.4cm  
象牙  
子供たちが背中やお尻で相手を押しながら円陣の外に出す遊びで、冬の季語でもある。その楽しさにつられて犬も猫も加勢している。



和地 一風 (1970～)  
「見立て波兎」 高4.5cm  
象牙  
波兎は繁栄と飛躍を象徴する縁起物とされるが、ここでは遊び心を活かして兎の兜をかぶった武将が置き盾でサーフィンする姿に。



高木 喜峰 (1957～)  
「ユニコーンの休日」 高3.3cm  
メイプル・ハイブリットオパール  
世界に冠たる大リーガー、大谷翔平選手は投打躍動を称賛されて「ユニコーン」の異名を持つ。グラブの中で更なる飛躍を夢見ている。



平賀 胤壽 (1947～)  
「游狐」 高5.9cm  
象牙  
狐は妖術を使って人間に化けるとした説話は多く、九尾の狐が化身した玉藻前、安倍晴明の母とされる葛の葉などが有名である。



宍戸 壽雲 (1960～)  
「加勢鳥(かせどり)」 高4.8cm  
象牙  
山形に江戸時代初期から伝わる奇祭で、藁蓑(わらみの)を被り唄い踊りながら家々を回り、商売繁盛、五穀豊穰、火伏せなどを祈る。

# 3月 ■ 3月1日(金)～31日(日)

## 「私が選ぶ一品」展

今月は作家本人が選んだ一品とその思い入れを紹介します。現代根付は作家性が重視され、物語性や自己の内面を投影した作品も多く、作家それぞれの創作スタイルの違いも見どころです。昭和時代は徒弟制による、工房での画一的な制作が多く見られましたが、平成、令和と移るにつれて様々な経歴を持つ作家たちが参入し、現在は百花繚乱の様相を呈するまでになりました。個人の作風も変遷していくなか、果たして作家はどの作品を選ぶのでしょうか? 「今を生きる作家と進む美術館」を目指す当館ならではの企画をお楽しみください。



黒岩 明 (1949～)  
「未来への願い」 高7.3cm  
象牙  
平和な未来を希求する作者の想いから制作された。花と葛でおおわれ兵士の墓と金工技術を活かした小銃は、英霊への鎮魂を表現している。



及川 空観 (1968～)  
「少年空想探検隊」 高3.9cm  
象牙  
誰もが気ままな空想にふけていた子供時代。尽きない好奇心は驚きの発見と感動の連続。その冒険心は、いつまでも忘れないために。



山本 伊多呂 (1961～)  
「婆ちゃん」 高4.9cm  
黄楊  
90歳を過ぎると日々子供に戻っていくかのようで、若い頃我が身を委ねた親との立場が逆転していく。年老いたご両親への思慕の念に溢れている。



森 哲郎 (1961～)  
「風雷神」 高4.3cm  
象牙  
「六面体であること、四方天地どこも見どころがあること」を大事にして制作したと語る作者の造形力がいかに発揮された作品。



栗田 元正 (1976～)  
「わしが在所」 高6.3cm  
象牙  
薪や柴を頭に載せて行商した大原女は京都の風物詩であった。一度作ったのちに違うアプローチで再トライしたことから思い入れの深い作品になった。